ISSN 2435-8193

東京大学大学院総合文化研究科　グローバル地域研究機構中東地域研究センター
［スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座］

UTCMES ニューズレター

VOL.25　2024

1. 学びの寄港地 …… 1
（1）西藤 陸 …… 1
（2）宇川 晴 …… 3
2. この一品――私の研究モノ語り …… 5
（1）槌谷 恒孝 …… 5
（2）平山 草太 …… 7
3. 駒場中東セミナー開催報告 …… 9
（1）池邉 智基 …… 9
平山 草太 …… 10
（2）苅谷 康太 …… 10
末野 孝典 …… 11
4. パフワーン文庫便り …… 11
5. スタッフ・発行者情報 …… 12

1. 学びの寄港地

（1）北海道パレスチナ医療奉仕団「第15次臨時パレスチナ医療・子ども支援活動」に参加して

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 「人間の安全保障」プログラム修士課程

西藤 陸

北海道パレスチナ医療奉仕団[1]の一員として、団長の猫塚義夫医師らに同行した。8日間という短い期間で、東エルサレム及びヨルダン川西岸地区にて活動した。気温は40度前後だが、空気は乾燥していてむしろこまめに水分を摂るため体調を崩すことはなかった。2023年10月7日以降、ガザ地区では未曾有の人道危機状態が続き、西岸地区や東エルサレムも緊張感が高まっている。

イスラエルのベングリオン空港に着いて目に飛び込んできたのは入管ゲートの端に並べ置かれた何枚もの顔写真。ハマースに人質に取られたイスラエル人のポスターである。また、空港から東エルサレムへ向かう途中の高速道路では街灯一本一本にイスラエル国旗が掲げられている。パレスチナを5回訪れている団員の一人が「こんなに国旗を掲げているのは初めて見た」と驚いていた。人質解放のポスターと過剰に掲げられた国旗は、ハマースやパレスチナなどに対抗するナショナリズムを高めんとする姿勢の顕れであろう。

現地の医師サリーム先生と合流し東エルサレムの街を歩く。ダマスカス門から旧市街に入ると、日常と占領の暴力との交差が見えてきた。子どもを連れたムスリマが石造りの美しい旧市街を、買い物かごを持ってゆったりと歩いている。対照的に仰々しい機関銃をぶら下げたイスラエルの治安部隊があちこちにたむろしている。時折「武装」したイスラエル兵に、「丸腰」のパレスチナ人が取り締まられる。滞在中毎日この光景を目にするうちに、おかしいと思う感覚や恐怖心がマヒしていくようであった。

2日目　「いびつな街」、シュアファット難民キャンプ

シュアファット難民キャンプにて日本から持ってきた「赤い涙」を背に、集合写真

東エルサレムのシュアファット難民キャンプにある、アルクドゥス・チャリタブル・ソサエティという施設で猫塚先生の診療が行われた。その間、元教師で施設職員のムハンマドさんにキャンプの中を案内し

1　2010年よりパレスチナ現地での医療・教育支援活動を行う団体。筆者は高校生の頃からお世話になっている。

てもらう。パレスチナの難民キャンプは、キャンプという言葉の一般的な認識とはかけ離れている。70 年以上の難民生活の中で形成された「いびつな街」と言っていい。10 階程度の集合住宅がひしめき合いその 1 階部分は小さな商店や車の修理屋が立ち並ぶ。頭上にはどうしようもなく絡まった電線が張り巡らされ、地面は舗装が剥げ、でこぼこしている。ゴミや下水の未処理が常態化し、所々鼻をつまむほどの臭いがする。エアコンの室外機の有無から、キャンプの中にある経済格差という都市的な一面が見て取れる。昼のアザーンが響いたころ、イスラエル兵が数人、大通りのど真ん中を陣取って「日課」の取り締まりをはじめた。「(大通りに) 一人で出たらだめ!」と、ムハンマドさんに制止された。

2km² 弱の広さに約 4 万人の人口を抱えるキャンプ内には、高校以上の教育機関がない。高校生以上の生徒や学生はキャンプ外に通う。しかしキャンプを出る検問所は一つしかないうえに、窓口の数や検問の厳しさが日によって変わる。多くの人が出入りする朝は、長蛇の列ができる。バスで通過する際は、一度全員が降ろされ ID カードや手荷物をチェックされる。不安定で過激なプロファイリングに人々は毎日耐えているのだ。

キャンプの一角では、モロッコやドイツなどの外部ドナーによる建物が公共の施設として用いられている。エレベータがついていない障害者のリハビリ施設に対して「日本の寄付でこの建物にエレベータをつけてよ」と冗談半分、真剣な表情でムハンマドさんが訴えた。移動や経済活動が著しく制限されている中で、外部に依存することで「社会」が存続している。難民キャンプという「街」のいびつさをまざまざと感じた。

大通りでは子どもたちが元気に走り回っている。小学生くらいの男の子たちは「シーニー? (中国人か?)」と話しかけてくる。「ラー、アナ　ヤーバーニー (違うよ、日本人だよ)」と答えると、「ヤーバーニー、ヤーバーニー (日本人、日本人)」と無邪気に絡んでくる。コラコラと大人が引き離すと、ふざけあいながら去っていく。20 歳くらいの青年になると、道にバイクをつけてたばこをふかしている。前を通ると「スーラ! (写真!)」とピースをする。撮ると満足そうな表情をして、もういいからと手を払う。彼らには我々がどのように映ったのだろうか。我々が彼らをどう見るかより、彼らが我々をどのように見てどう思うのかという逆の視点の重要性を感じた。

お昼に、大鍋で作る「マクルーバ」をいただいた。具だくさんの炊き込みご飯である。施設の方が大皿にドカンと盛り付けると、みんなで拍手をした。そのままだとかなり脂っこいのだが、ヨーグルトをあえるとさっぱりと食べやすくなる。すぐにおなかいっぱいになってしまったが、気を抜いたすきにおかわりが盛られてしまった。

3 日目　多様な人々と接する

ラーマッラーの郊外にあるベイト・ウールという村を訪れ、活動を行った。パレスチナの名家の寄付によって建てられた、リハビリ用の温水プールやプレイルームが完備されている施設で、猫塚先生は障害のある子どもを中心に診療する。私はほかの団員と、子どもたちとの交流活動を行った。とりあえず知っている言葉を並べて、会話を試みる。「マスムカ? (お名前は?)」と聞いてみるが、伝わらない。紙にアラビア語で書くと「マフムード」と答えてくれた。13 才のマフムードは、「パレスチナでは名前を聞くとき『マスムカ』ではなく『シュスムック』と言うんだ」と教えてくれた。これがアーンミーヤかと納得する。とりあえず名前を聞くところから打ち解ける術を得た。

バレーボールや折り紙で交流を試みるが、やんちゃな子たちがボールを占有してしまい、年少の子や障害のある子がなかなかボールに触れない。集中して手先を動かす経験がないのか折り紙も作り終える前に飽きてしまう。新聞紙で折ったかぶとや、日本から持ってきたポケモンのシールで遊んだ。「ブキムン、ブキムン (ポケモン、ポケモン)」と喜んでいた。個性豊かな子どもたちに、長い待ち時間を少しでも楽しんでもらおうと工夫してみたが難しかった。

ベイト・ウールのリハビリセンターにて子どもたちとの交流　後ろには診療に付き添う保護者たち

ベイト・ウールを出て田舎の方に向かい、着いたのはオリーブとミントの畑であった。地下水を汲み上げ水をまいていた。1948 年と 67 年を経てイスラエル領内となった村々が遠くに見える。この農家の祖先が住んでいたという。難民化を経験しながら「故郷」の村を望める場所で定住することに何かこだわりがあるような口ぶりであった。周りのパレスチナ人たちが皆、生えているミントを摘んでそのまましがんでいたので筆者も真似をしてみた。最初は上品な香りが口いっぱいに広がり、意外といけると思ったが、噛むとやっぱりかなり苦かった。

その後、延々と続く分離柵の目前に位置するベイト・ヌーバーという村を訪れた。柵の手前 100 メートルくらいで舗道が途切れ、むき出しの地面になる。途切れ目より先では、国境警察にいつ撃たれてもおかしくないという。舗道と地面という経験的で感覚的な境界線が、柵という実効的な境界の手前に顕れていた。

ベイト・ヌーバーにて舗道の境界とフェンス

帰る途中、この辺りで一番と評判のスイーツ屋さんで本場のクナーファ・ナーブルスィーヤを食べた。シロップの甘さとチーズの塩味が引き立てあって絶品であった。その後、カランディヤー検問所を通過する。車が並ぶ中で、お菓子やおもちゃ、中には布団などを売る子どもたちが窓をノックする。検問所の前が「マーケット」と化していた。サリーム先生によれば、10 月 7 日以降、出入管理の厳格化によって東エルサレムで働いていた多くのパレスチナ人の収入が激減し、公務員の給料も減っているという。ガザ地区で危機的な状況が続いていると同時に、検問の強化や減収という構造的な形で西岸地区にも影響が及んでいることは確からしかった。

6 日目　聖地を訪れる

この日は、空いた時間で「嘆きの壁」、「アルアクサーモスク」、「岩のドーム」を訪れた。日本に暮らすガザ地区出身の友人に、モスクに行く際は教えてほしいと渡航前に頼まれていた。ガザ出身の彼らがエルサレムを訪れることは非常に難しいのだ。テレビ電話でモスクやドームの様子を映すと、とても喜んでくれた。「家族と一緒にアルアクサーモスクに行って礼拝することは生涯の夢だ」と電話越しに語った。彼女の家族は現在、ガザで避難生活を送っている。特別な許可もなく聖地に入れてしまう私と、彼らの聖地なのに行くことができない友人やその家族という対照性を肌で感じ複雑な胸中であった。

7 日目　金曜日の取り締まり

7 日目は金曜日である。多くの店が夜まで閉まり、ムスリムたちはアルアクサーモスクでお祈りをする。旧市街の取り締まりはこれまでの数日に比べて段違いに厳しい。この日はムスリムしかモスクのある区画に入ることができない。我々が近づいてもイスラエル兵に制止される。ムスリムかどうかというのは完全に見た目で判断された。イスラエル兵の前でクルアーンを暗唱した韓国人の青年も結局入ることができていなかった。ライオン門付近では、イスラエル兵は時々アラブ人を制止し、「ID カードを見せろ」、「パスポートを見せろ」と詰めていた。まさに気分次第といった感じで行われている「検問」であった。

ライオン門の前にて取り締まりを受けるパレスチナ人　横のイスラエル兵は日陰でたむろして談笑している

渡航から約一か月半経ち、写真や動画を見返しながらこの記事を書いているが、今でも昨日のこと以上に、一瞬一瞬を思い出す。もっと詳細に書きたかったが、紙幅の都合もあり大きく省略しての記述となった。出会った人々の日常は、ある側面では我々の日常に重なる。他方で占領による構造的な暴力から、取り締まりや襲撃といった直接的な暴力までが複雑に入り込んでいる。改めて、草の根の人々に目を向けた研究をしていきたいと思った。

最後に今回大変多くの人にお世話になった。各々の名前を挙げれば、それだけで紙面が埋まってしまうので記すことはしないが、奉仕団の皆さん、そして現地の人々、その全員に感謝を申し上げる。

(2) イランにて

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程

宇川 晴

はじめに 留学先、目的

私は、2023 年 4 月から 11 月までイランの首都テヘランにあるデホダー辞書協会・ペルシア語教育国際センターに留学した。まず留学の目的に関してだが、これには 2 つある。1 つはペルシア語能力の向上で、もう 1 つは研究資料の収集である。筆者は、1979 年のイラン革命後の政治思想について研究している。最初に資料収集について、後にイランでの経験について述べる。最後に、実際の留学生活を通して留学そのものについて考えたことを記しておく。

1 資料収集

1.1 書籍

資料収集の過程は資料の種類によって大きく異なるので、はじめに書籍について説明する。書店に関しては、テヘラン大学の南を走るエンゲラーブ通りに沿って大きな書店街が存在している。また、バーゲ・ケターブ（Bāgh-e Ketāb、本の園）などの大型書店もテヘラン市内に点在している。筆者が探していた書籍は大方 1990 年代か 2000 年代に書かれたものだった。従って大昔というわけではないのだが、一部を除いて書店には置かれていなかった。また店主の話によれば、国内で政治的迫害を受けた一部の作家の書籍は書店には置けないとのことである。エンゲラーブ通り近くには古書店もあり、その多くは何箇所かに集中している。例えばクーチェイェ・メフルナーズ（Kūche-ye Mehrnāz、メフルナーズ路地）。頭上を傘が埋め尽くしていたことからクーチェイェ・チャトリー（Kūche-ye Chatrī、傘の路地）とも呼ばれるが、現在は傘は撤去されている。

当然ネットの通販サイトを通じて書籍を購入することもできる。イランの書籍は 600 円から 800 円と基本的には安い。ただ通販を利用した際には希少とのことで 1 万円以上の値がつくこともあった。紙の書籍に加えて電子書籍も購入した。ターグチェ（Tāghche）などのプラットフォームが有名である。しかし PDF で閲覧できるものは多くなく、文字の大きさなどでページ数が変わってしまうため論文中での引用を考えている場合には注意が必要である。

書店やネットにないものも国立図書館

（Ketābkhāne-ye Mellī）に行けば見つかる可能性が高い。イランにも出版物を特定の機関に納める納本制度があり、イランの場合その担い手は国立図書館である。日本の国立国会図書館と同様、貸出はできず館内閲覧とコピーのみ可能である。ちなみにイランは国際的な著作権保護の枠組みであるベルヌ条約に参加しておらず、外国の著作物は保護されない。しかし国内の著作物は保護されるようで、国立図書館におけるコピーは著作全体の５分の１に限定されている。なお、基本的に大学院生以上でなければ国立図書館は利用できないが、クルアーンの暗唱者であれば利用が許されるという。学部生の方には是非挑戦してみていただきたい。最後になるが、博士論文は国立図書館の地上階にあるコンピュータ室で閲覧した。

エンゲラーブ通り近くの路地、古本を路上にばら撒き売っている

1.2 雑誌

雑誌については、国立図書館の館内で利用できる､ナマーマトン（Namāmatn）というイラン国内の雑誌・新聞のデータベースを使った。ウェブ上で利用できると述べる記事もあるが、記事に掲載されている URL が切れているうえ、検索してもそれらしいサイトは出てこない。筆者は実際に図書館に行き、必要な部分を USB に落としていた。データベースにないものに関しては、国立図書館の地上階にある雑誌閲覧室に行き、書庫から出してもらった雑誌をコピーするなどした。先に述べたように納本制度があるため豊富な資料が所蔵されている。この他テヘラン大学の中央図書館の地下にある定期刊行物の書庫も役立った。職員の方も非常に親切である。以上、資料収集の過程である。少しでも参考にしていただければ幸いである。ここまで硬い話になってしまったので次に留学生活を通した経験について述べる。

2 宗教と文化

「宗教は文化だから」、トルコ人の友人はそう言った。私が住んでいた寮には多くの外国人留学生が居住していた。当初は中国人やロシア人が多かったが、トルコやセネガル、ナイジェリアからの留学生もいた。ある時私とナイジェリア人、トルコ人の友人で話していると、宗教の話題になった。そのナイジェリア人の友人はシーア派で信仰心が篤かった。毎日の礼拝を欠かさないのはもちろんのこと、使いすぎてぼろぼろになったクルアーンを誇らしげに持ち歩いていた。彼はナイジェリアの政府がいかに腐敗しているかを説き、イスラーム法による法の支配が解決策であると語った。そこで私はトルコ人の友人に話を振った。宗教についてどう考えているか尋ねると、彼は「宗教は文化だから」と言った。彼の立場はこうである。彼はたしかにムスリムである。かつて信仰告白もしたし、開端章（クルアーンの最初の章であり、礼拝の際に読まれる章）だって覚えている。しかしイスラームの教えを本気で信じているわけではない。文化としては興味深いけれども、これは信仰心とは全く別の次元の話である。これを聞いたナイジェリア人の友人は苦笑いしていた。

その後しばらくしてから３人で近くのモスクにロウゼ・ハーニー（rowẕekhānī）を見に行った。ロウゼ・ハーニーとは３代目のイマーム（シーア派の指導者）であったホセインとその一族の殉教を偲ぶ哀悼行事である。ホセインはイラクのクーファに向かう道中、カルバラーにて敵対するウマイヤ朝の大軍に包囲され一族とともに惨殺された。ロウゼ・ハーニーではカルバラーの悲劇を改めて語り、殉教した彼らを哀悼するのである。我々３人はロウゼ・ハーニーが始まる前にモスクについたため、人々は思い思いの場所に間隔を空けて座っていた。そこに説教師が現れ、「悪魔があなた方の間を通るから」と人々を自分のもとに寄せ集めた。その日は主にホセインの兄弟、アッバースについての話だったと記憶している。ホセインやアッバースの一族への思いとアッバースの悲惨な最期が語られた。説教師の感情のこもった語りにその場にいた人々は涙していた。最前列で声を上げて泣いている老人もいれば、後方で静かに涙を流している若者もいた。しかし重く湿った空気が場を満たしていたその時、自分の右側からシャッター音が聞こえた。それほど大きな音ではなかったが、その場の雰囲気になじまない音だったためか実際の音量以上にはっきりと聞こえた。私が右を向くとトルコ人の友人がスマートフォンのカメラを構えているのが目に入った。しかし周囲の人はそれほど気にしている様子もなくそのまま行事は続けられた。

以上がロウゼ・ハーニーを見に行った日の記憶になるが、別にトルコ人の友人を責めているわけではない。彼とは仲が良かったし、本質的には闖入者である自分が彼を責められるはずもない。ただ、このことは宗教観の違いを鮮やかに示す出来事として今も記憶に残っている。

ナイジェリア人の友人のクルアーン、だいぶ使い込まれている

3 学びと経験

私はイランでの留学生活から何を学んだのか。正直に言ってこの問いに答えることは難しい。次のような経験を例に挙げこのことについて考えてみたい。

私はある日、中国人、イラン人の友人とサッカーの試合を観戦しに行った。スタジアムでは何度も手荷物検査があった

が、特に問題なく通過できていた。しかし最後の一回で引っかかり、脇の方に呼ばれた。係員は私に「テリヤークを持っているか」と尋ねた。その単語を知らなかった私は説明するよう求めたが、係員は答えず同じ質問を繰り返すばかりだった。しびれを切らした係員はかばんの中身をすべて出し、パスポートを見せるよう私に言った。しかし私にはどうしても「テリヤーク」が「照り焼き」にしか聞こえず、係員の「照り焼き」への執着に困惑するしかなかった。結局イラン人の友人に係員と話してもらい、ゲートを通過することができた。その友人の解説によれば、係員は私をアフガン人と勘違いし、「テリヤーク（teriyāk)」、すなわちアヘンを所持していないか確認したとのことだった。

私はこの経験から何を学ぶことができるのか。仮に何らかの学びがあったとしてもそれを「～を学んだ」という形で定式化することは難しい。それはこのように定式化するにはあまりにも些細である。それでは私にとってイランでの半年間は何だったのか。それは学びというよりは経験である。経験は様々な仕事をする。それは些細な教訓を与え、感受性を形作る。また、すぐには人に影響を与えず、ただ解釈を待っている経験もある。グローバル化が進む中で、厳密な意味で留学先でしかできない経験というのは少なくなっていくのかもしれない。しかし留学する当人にとって新しい経験をすることはできるだろうし、そこに留学の意義があるのではないだろうか。少なくとも筆者はそう考えている。

2. この一品――私の研究モノ語り

（1）ヨックモックを通じて知る紛争地イエメンの姿：愛される日本のクッキーとイエメンコーヒー

神奈川大学特任講師
東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム博士課程
槌谷 恒孝

中東で大人気の日本のクッキー

「ヨックモック」とは葉巻の形をしたシガールというクッキーを中心に百貨店でもよく見かける日本の洋菓子店である。このヨックモックが実は中東では大人気であるということを最近知った。昨年にはサウジアラビアに初出店したという。実は私は以前からこのヨックモックのクッキーが好きで、アフリカで勤務していた時から同僚へのお土産として時々持参していた。イエメンではその頻度と重要性が増し、なくてはならないものとなった。このクッキーがいかにイエメン駐在時代の私の仕事や生活を助けてくれたかについて紹介したい。

2024 年度に博士課程に入学する前年まで、計 14 年ほどアフリカと中東に滞在していた。そのうちの多くは国連開発計画（UNDP）での勤務で、最後の 2 年間はイエメンで平和事業支援ユニットのチームリーダーを務めていた。このポストではイエメンの平和構築や開発にかかわる研究や報告書の作成にも携わっていた。

イエメンは紛争によって国が実質二分されている。国際社会から承認された政府が統治する南側とフーシー派と呼ばれるフーシー一族を中心とした勢力が実効支配する北側であるが、それぞれ別のビザがないと入国できない。使用する貨幣も異なり、中央銀行や統治機構もそれぞれ別にある。一般の人の渡航が制限されているため、ソコトラ島を除けば外国人が入国するのは極めて難しい国であり、私の勤務地であった首都サナアはフーシー派によって実効支配され、今もこの状態は続いている。

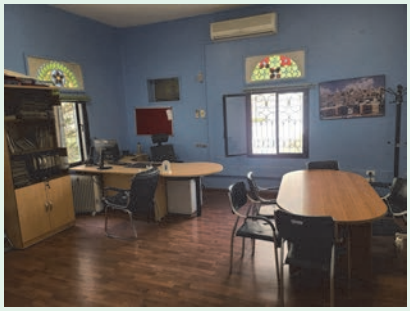
国連職員の行動は著しく制限され、全スタッフは UN コンパウンドと呼ばれる用意された住宅に居住し、職場とそのコンパウンド以外は許可がない限りは移動を禁止されていた。こういった厳しい環境だったため休暇は比較的多く与えられ、コロナ禍であっても年に数回は日本に帰国することができていた。

日本からイエメンに戻るとき、必ず買って持って行ったのがヨックモックのクッキーであった。有名なシガールではなく、ラングドシャと呼ばれる四角い形をした、中にアーモンドクリームやチョコレートの入ったクッキーである。1 枚 1 枚が小さく、20 枚程度が小分けにされ 1 つの四角い缶の箱に入っている。そのためスーツケースに入れても割れないのもポイントである。これを毎回最低 4 箱は持って行った。なぜこのクッキーだったのか。それは、お土産として常に好評であり、自分で食べてもおいしいという単純な 2 つの理由からである。

「クッキーが帰ってきた」

このクッキーはとにかく現地のスタッフから好評を博していた。イエメンに限らず国連開発計画（UNDP）では国際スタッフが一時帰国の際などお土産を買ってきて配ることは一般的であった。その際日本だからと言って和菓子を買って配っても、現地のスタッフにはあんこや羊羹といった独特の食感や味を好まない人もいる。その点小分けになっているちょっと上品なクッキーは誰からも好まれる。そのため、私がオフィスに戻ると現地の男性スタッフはわざわざ私の執務室にクッキー目当てに挨拶に来てくれる。机の上にクッキーの入った缶を置いておいておくとそれに手を伸ばし、不在中の出来事や日本の話に花を咲かせる。現地の女性スタッフはよっぽどのことがない限り男性スタッフの個室オフィスには入ってこないので、私の方から配りに行く。最初に私を見ると「クッキーが帰ってきた」と軽口をたたくスタッフもいるほど待ち望まれていた。ほとんどの女性スタッフはヒジャブ（顔以外を覆うスカーフ）か

ニカブ（顔も覆い目の部分だけが開いているスカーフ）をかぶっているが、特にニカブの女性とはほとんどゆっくり話す機会がない。そのためこのクッキーの配布を通じて直接会話をする機会ができる。こういったたわいのない会話ややり取りが仕事にとても役に立つことがある。



UNDP イエメン勤務時代の執務室

あるとき、私がサナアに戻ってきた日に早速チームの男性スタッフが私の執務室に駆け込んできた。しかしそのスタッフはすでに顔が紅潮しており、いつもと様子が違う。執務室に入るなり「私の叔父が昨日ライフルで撃たれたんです。おそらく兵士と間違って撃たれました」とまくしたてた。私はヨックモックの箱を開けてクッキーを勧め、コーヒーを飲みながら 1 時間にわたり彼と親戚の身の上に起こった話を聞いた。普段、オフィスではなかなかプライベートな話を聞く機会は少ない。現地のスタッフの中でも派閥があるため、簡単に政治的な話はできないからだ。しかしその日の彼の話はイエメンの紛争がいかに国民の生活に影響を与えているかにまで及び、紛争地で日々生きることの大変さを私に知らせてくれた。

当時私は UNDP とデンバー大学ジョセフ・コーベル国際研究大学院の共同研究報告書「イエメン内戦がもたらす影響の検証：復興への道のり」の日本語版発刊のための翻訳校閲作業を行っていた。同報告書はこのまま 2030 年まで内戦が続くと 130 万人の死者をもたらし、そのうち 70%が間接的な要因で死亡すると推計している。現地のスタッフから聞いた話は、最初はライフルで撃たれた叔父の話であったが、持病が悪化したときに病院で手術ができず亡くなった近所の人の話であったり、生まれてすぐの乳児が原因不明で亡くなった親戚の話であったりと、紛争による間接的な死者の話へと広がっていった。紛争が無く、病院がきちんと機能していれば生きていたはずの命が失われている、という嘆きであった。彼の話は研究報告書を現実の話として実感する瞬間であった。

また、このクッキーを毎回もらいに来るセキュリティ担当のスタッフはお礼として、私を彼の執務室に呼んでくれ、コーヒーの皮を煮出したお茶、キシュルをごちそうしてくれるようになった。キシュルは、ほのかにコーヒーの香りがするが飲むと酸味が口いっぱいに広がる、コーヒーとは似て非なる飲み物である。最初は抵抗があったが何度か飲んでいるうちに飲めるようになり、彼の執務室でほかの同僚とともにキシュルと甘いイエメンのお菓子をたしなむ時間を楽しむようになった。イエメンでは国連スタッフが誘拐されたり、コンパウンドの近くが空爆されたりとセキュリティ担当のスタッフは何かと大変なのだが、ここでもそういった業務の貴重な話を聞けるのが楽しみであった。

キシュル

イエメンコーヒーとクッキー

クッキーをイエメンに持っていく 2 つ目の理由は私がこのクッキーを食べたいからであるが、それはとにかくこのクッキーとコーヒーの相性がとても良いからである。私はもともとコーヒーを飲む習慣がなかったが、イエメンで働くようになってからコーヒーを好んで飲むようになった。コーヒーはイエメン人にとってとても身近で貴重なものである。かの有名な「モカコーヒー」のモカはイエメンの港の名前であり、多くのコーヒーがこのモカ港を出発して世界各地に届けられたことから名づけられた。イエメン人の飲むコーヒーにはスパイスと砂糖がたっぷり入っており、他国のコーヒー通からしてみると、せっかくの豆の香りを台無しにする、と評判はあまりよくない。しかし、私は個人的にこの甘いコーヒーが気に入りよく飲むようになった。一方、コーヒー好きの欧米人の同僚はおいしいコーヒー豆を売る業者を現地スタッフに紹介してもらい、自分たちでコーヒーを淹れて飲んでいた。この高品質のイエメンコーヒーは苦みも少なく、フルーティーで飲みやすいコーヒーであった。イエメンのスパイスコーヒーでコーヒーを飲む習慣ができていたので、私も段々と同僚に淹れてもらって飲むようになり、いつしかコーヒーを飲むことが日課となった。そのコーヒーと軽い食感のクッキーが合うので、お土産と言いながら割と自分でも食べていた。

そんなイエメンのコーヒーにも紛争は影を落としている。そして私の仕事ともコーヒーは深く関わっていた。イエメンではコーヒー生産が盛んであったのだが、紛争勃発以降、葉を噛むことで覚醒作用をもたらすカートと呼ばれる植物の生産に変更する農家が増えた。カートはイエメン人に広く愛され、多くのイエメン人が社会的儀式や日常の娯楽としてその葉を噛む。カートを噛むことで中枢神経系が刺激され、興奮や多幸感をもたらすと言われており、紛争で苦しむイエメン人にとって紛争を忘れられる数少ない娯楽なのであろう。カートはコーヒーよりも収穫頻度が多く、少ない手間で収益性の高い換金作物である。そのため、紛争後のカート需要の高まりに応じ、コーヒーからカートへと生産を切り替える農家が増えたのである。カート生産には多くの水を消費することから、地下水が今

後 20 年以内に枯渇すると言われているイエメンでは水不足問題を加速させる要因としてこの変化は危惧されていた。

イエメンの水問題の解決のため、2021 年に援助国と国際機関の間で援助活動を調整する委員会が立ち上がり、国連側の代表として私が任命された。そして UNDP として水問題への取り組みの 1 つとして、農家がカート生産の代わりにコーヒー生産を再開できるような支援を行うために、コーヒーとカートのバリューチェーンに関する調査を行った。また、水資源に関する紛争分析の調査も行った。こういった調査を統括する立場にあったのでいつの間にかイエメンコーヒーにも愛着がわき、貴重なイエメンコーヒーを日本に持ち帰ってコーヒー好きの親戚や友人にお土産として配るようになった。自らバリューチェーンの一端を担うようになったのである。

以上のようにヨックモックのクッキーは、時にコミュニケーションのツールとして、時にコーヒーのお供として、私のイエメンでの仕事や生活に欠かせないモノであった。このクッキーの唯一の欠点は小分けの袋が開けにくいことである。上手に袋を開かないと中のクッキーが割れてしまう。大体みな最初は開け方がわからず、無理やり袋を破って開けようとして粉々になったクッキーを掌に載せて食べることになる。あの食感を味わえなくなるのはもったいないといつも思う。

イエメン事務所の同僚たちと

国もクッキーも外から無理やり力を加えると簡単に割れてしまう。クッキーは割れたら元に戻らない。国はまだ戻せるかもしれないけれど。外からなるべく力を加えないで、割れない国をどのように取り戻すか。これが私の今の研究課題である。

私の研究室

私が所属していた国連開発計画（UNDP）イエメン事務所はイエメンの首都サナアにオフィスがある。イエメン国内には他にもホデイダとアデンに事務所を持ち、総勢 200 人程のスタッフが働いている。担当していた平和事業支援はイエメンの和平に向けたプロジェクトを実施していたが、紛争に関する様々な調査・研究も行っていた。イエメンの紛争を異なる視点から分析する機会が多く刺激的な職場であった。

(2) ヤウンデのイスラーム書店：読んだことのない書物について堂々と語ることの意義と可能性

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻特任研究員（日本学術振興会特別研究員 PD）

平山 草太

書物なるモノへの愛憎

私は読書が苦手である。理由は 2 つある。1 つは身体的のもので、手短に言えば、長いあいだ同じ場所にじっとしているのが不得手であることによる。もう 1 つは、精神的理由である。読書に際しては、ほんの 1、2 単語程度であれ書かれた文言を読むと思考が暴走を始めるため、気づけば本文から遠く離れた場所で遊んでいる思考を慌てて本文に連れ戻すという作業を繰り返さねばならない。このような有様では、およそ働いているとは言えない生活を送る私であってさえ、書物を満足に読み進めることなどできないのであり[1]、やはり読書のためには身体への有無を言わさぬ強制力こそが必要なのではないかと思ってしまう[2]。

他方で私には、幼少期より書物なるモノの愛好家であり続けてきたという自負がある。ただ「読む」ことの 1 点に限ってはこれを苦手とする、たしかにそれはそうだけれども、「眺める」「触る」「書店に通う」「買う」「売る」「揃える」「書く」「複写する」「解体する」「電子化する」「読書環境を整える」…といった種々の書物との関わり方の深さやその頻度、つまり書物というモノへの愛情においては、人後に落ちない自信を持っているのだ。

しかし、残念なことに書物の中身を「読む」ということ、これが何より苦手であるために、書物への強い愛着をもちながらも、今日まで文献学的な研究の方向性をとることができずにきた。大学院では、文化人類学を基軸とした地域研究という、書物を大量に読むことを必ずしもその第 1 の価値基準としない（あくまで私見です）分野を専攻し、中部アフリカのカメルーン共和国に暮らすムスリムたちを研究対象としてきたが、なにぶん、私は書物を読むことを好まないものの、とはいえ好きなものといえば書物くらいしかなく、かつ身体性にまつわる物事全般に関して感度がきわめて低いこともあり、口頭での歴史語りや子どもたちのクルアーン読誦学習といった「アフリカのイスラームあるある」というべき諸トピックには、お作法的にはともあれ、やはり根源的な関心を持ちえなかった。

そのようななか、博士論文執筆前の最後の現地調査にて、ようやくこれまでの研究を「書物―人間関係の民族誌」というモチーフのもとにまとめ、首の皮一枚で院生生命をつなぎとめることに成功したのは、ある対象の「発見」によってのことであった。それというのも、イスラーム書店という民族誌的記述対象の「発見」であり、本稿で語ろうとしているのもこの「発見」についてである。

1　三宅香帆、2024。『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』集英社。
2　Ware, Rudolph. 2014. *The Walking Qur'an: Islamic Education, Embodied Knowledge, and History in West Africa.* Chapel Hill: The University of North Carolina Press.

書店研究の可能性

カメルーンの首都であるヤウンデには、イスラーム関連の書物を取り扱う、合わせて７店舗ほどの書店（これらをここでは「イスラーム書店」と呼称する）が存在する。これらイスラーム書店を調査対象とみなすに至ったのは、私が先行する西・中部アフリカのイスラーム研究に対して抱き続けてきた、「あまりにも簡単に思想の存否や拡散を断じすぎる」という不満に由来する。当然ながら、ある何らかの輪郭を持つ思想がそこにあると主張することは簡単ではない。ある思想の発明と模倣の連鎖、換言すれば言説的伝統の存在を具体的に他者と共有できるかたちで示さなければならないからだ。しかし多くの人類学的研究が（歴史研究については別枠扱いとしておきたい）、一部の人物の発言や短期的なインタビュー調査の結果から、あるいは中東諸国の寄付した建物や教科書類等の存在有無等から、特定の思想の当地への伝播や存在、はたまたそれらへの「抵抗」をあまりにも安易に前提としてしまっている。私はこのことに不満と居心地の悪さを覚えてきた。

これが、私をやむなく書店調査へと向かわせることとなった大きな理由である。なお現状として、スマートフォンとSNSの普及に伴う新たなメディアの存在感の大きさは無視しえないものの、やはりイスラームについて勉強したいと願う者がとる手段の基本が、書物を読むことであるということに大きな変化はみられない。そして、彼らが書物を入手する先のうち、もっとも万人に開かれているのは書店である。したがって、カメルーンにおけるイスラームの言説的伝統について何らかの主張をなすに際して、書店にこそ代表的に集約されている書物群の形象を示すことが基本となるべき作業であり、人々の語りや実践を扱う調査は、そうした書店調査という基礎のうえになされるべきと考えるに至ったのである。

ここで、ピエール・バイヤールが紹介する、ある小説中の風変わりな図書館司書のエピソードを思い起こそう[3]。このエピソードにおいて、膨大な図書館の蔵書を管理するその司書は、自身の取り扱う蔵書群について、意図的に１冊たりとも目を通さずにいると断言する。なぜなら有能な司書にとって重要なことは、「図書館にはどのような書物がどのようにあるのか」を知っていることだからだ。逆に、読むことによって個々の書物の内部事情に固執することは、時間の有限性ゆえに間書物的ネットワーク＝「共有図書館」についての知識を得ることを妨げるのだという。

書店調査に際し、私もこの有能な非読派の司書に範をとり、イスラーム書店においてどのような書物がどのように入手可能であるのかを、個々の書物の内容には極力踏み込まずに、ただ網羅的に調べることを優先した。そうすることで、書物を「読めない」自身の短所を、逆に長所として調査に活かしうると考えたからだ。そうして、民族誌的登場人物としてのいわゆる「ふつうのムスリム」が、どのように身近な「共有図書館」のもとにいるのかという問題の一端を、量的な傾向性を伴って示すことができるはずだと予期したのである。

調査の結果からみえたモノ：「カノ書物圏」とその問題系

ヤウンデ最大のイスラーム書店の協力を仰ぎ、実際に目録化した書物の数は792タイトル・6853冊にのぼった。調査に際してはまず、乱雑に書物がバラ撒かれた棚の整理が必要となる。堆積した埃、付着した鼠等（あくまで「等」）の糞、走り回るゴキブリ、猫、といった連中をかき分けながらの作業となったが、なにより最大の苦痛であるところの「読書」、これをせずに済むのだからどうということもない。こうしておおよそ10日間ほどかけて書物の撮影とカウントを終えると、次に断続的に半年ほどかけて目録作成と分析作業をおこなった。結果の詳細は別稿に譲るが、以下ではその一端を紹介しよう。

まず出版地の傾向として、産地不明のものも含め、おそらくナイジェリア産と考えられる書物が在庫全体の約半数を占めることが挙げられる。ついで、エジプト・レバノンという出版の中心地で発行されたものが続く（それぞれ10%前後）。他方で、カメルーン国内や他の西・中部アフリカ諸国で出版された書物はほとんど存在しないこともわかった。

これらの在庫のうち、最も代表的な書物は当然ながらクルアーン（ムスハフ）であるが、『イマーム・マーリクの学派に拠る儀礼行為についてのアフダリーの提要』のような西・中部アフリカで歴史的に長く読み継がれてきた、いわゆる「歴史的コア・カリキュラム」[4]に属するマーリク法学派の定番書物類が数多く見られる。また、『ムスリムの砦』に代表される比較的近年アフリカ各地に入ってきた書物群も部分的に存在したが、その需要はかなり限定的であることも窺われた。

総じて言えるのは、古典的かつ世界的ベストセラーと言うべき書物が在庫の多くを占め、カメルーン国内やナイジェリ

3　バイヤール, ピエール。2016。『読んでいない本について堂々と語る方法』大浦康介訳、筑摩書房。
4　Hall, Bruce. and Charles Stewart. 2011. The Historic "Core Curriculum" and the Book Market in Islamic West Africa. In Graziano Krätli and Ghislaine Lydon eds., *The Trans-Saharan Book Trade: Manuscript Culture, Arabic Literacy and Intellectual History in Muslim Africa*. Leiden: Brill, pp. 109-174.

ア北部の著者によって書かれた、いわば「地元」の書物がほとんど取り扱われていないということである。書店主たちの経済性を重視する行動指針を踏まえれば、彼らの品揃えは、需要のあり方を反映するものと見ることが可能である。

また、書物の仕入れ先は、中東諸国産のものも含め、ほぼ全てナイジェリア北部の都市カノの市場であり、それは近年の歴史研究の成果とも合致することがわかった。さらに、それら仕入れられた書物は行商活動を通じて、カメルーン南部の諸都市、隣国ガボンやコンゴ共和国へと流れていっていることもうかがわれた。

まとめると、ヤウンデのイスラーム書店は、ほぼ全ての在庫をナイジェリアのカノ経由で仕入れているが、その品揃えは固定的な売れ筋商品に多くを占められていることから、ナイジェリア北部の知的流行からは一定程度独立した存在であると判断できる。そして、行商活動を通じてそれら書物を南方の各地域へと流していってもいる。

このように見ると、カノを発信源あるいはハブとして書物が中途で選択されつつ南方へと流されていく流通圏を想定す

ることができる。この流通圏を私は暫定的に「カノ書物圏」と呼ぶことにしたが、この「書物圏」概念にはその構造を考えるうえで問題がいくつかある。その１つは、カメルーン北部地域（例えばンガウンデレのような）やナイジェリア北部の諸地域において、書物流通の状況が果たしてどの程度ヤウンデと共通しているのかが明らかでないという問題だ。簡単に言えば、これらの地域では、より「高度」で「トレンディ」な書物が流通している可能性が想定されるのである。このように、現時点でヤウンデとカノと南方諸都市という「点と線」のもとでのみ把握された「カノ書物圏」については、その外延のみならず、内的コミュニケーションの構造に関するより詳細な研究が必要となる。そしてそれは、当然ながら西・中部アフリカのイスラーム研究をとりまく長年の課題、すなわち「中心」と「周縁」をめぐる諸問題を、書物とその流通という具体的な形象を通して解明しようとする試みに他ならない。

ヤウンデの書店において始まった書物流通の研究は、当初思ってもみなかった新しく広大な研究領域につながっていることがわかってきた。書物を読むことへの苦手意識が、ここに至ってライフワークにつながるスケールの大きな研究テーマをもたらしてくれたことになる。世の中に役に立たないモノなどないというのはまさにこういう事態を指して言っていたのだろうと、唐突にも教訓めいた感想を記して、強引ながら本稿をとじることとしたい。

3. 駒場中東セミナー開催報告

（1）2024 年 6 月 29 月（土）
駒場博物館展示「セネガル・イスラームの歴史と文化」連続ギャラリートーク 1

『セネガルにおける多彩なイスラーム実践：口頭伝承と出版、SNS まで』
池邉 智基（日本学術振興会特別研究員 PD）

企画展「セネガル・イスラームの歴史と文化」において宗教実践に関するモノや写真を担当した池邉氏は、セネガルにおけるスーフィー教団の実践を軸に、伝承から出版、果ては現代の SNS の使用に至るまで、多様な言語活動について概観する発表を行った。

講演の冒頭で、池邉氏は、西アフリカ・イスラーム研究が、アフリカ研究においてもイスラーム研究においても周縁化される傾向にあることを指摘した。その背景には、「無文字社会」とされてきた西アフリカ研究における史資料の状況と研究分野の偏りの問題が潜んでいるという。すなわち、西アフリカには、欧米出身の旅行者などの旅行記や現地のアラビア語史料、口頭伝承から植民地行政文書まで、全く別種の史資料が偏在しており、その交差点において歴史像が立ち現れるという実情がある。その上、これらを分析する視角は、民族誌学と文献学という長年断絶してきた２つの分野に跨っているのだ。

このような研究状況のなかで、池邉氏は、セネガルで活動する多彩なスーフィー教団のひとつである、ムリッド教団のイスラーム実践について研究を行ってきた。そもそもセネガル社会においては、フランス語、アラビア語、ウォロフ語という３つの言語の棲み分けが見られる。植民地期以来の公用語であるフランス語、宗教言語であるアラビア語に対して、ウォロフ語は、国民に広く理解される話し言葉である。池邉氏はこのウォロフ語での説教に着目し、ムリッド教団における口頭伝承と教義の関係について探ってきた。とりわけ、教団の開祖イブラ・ファルの著作がさして読まれておらず、信徒の宗教実践と著作の内容に齟齬があることに注目し、「教義は文字で書かれたものである」という観念を相対化したその研究は、『セネガルの宗教運動バイファル』（明石書店，2023）として刊行された。

今後、池邉氏は、セネガルにおける言説の再生産および流通の経路について研究を深めていくという。その際に重要なのは、言説がいかなる言語で、文字に記されるか口頭で伝えられるか、さらには、アナログなのかデジタルなのかといった種々の選択であると述べる。このような研究は、セネガルにおけるスマートフォンの普及とそれに伴う SNS 利用の拡大、さらには話し言葉であったウォロフ語の文字化への動きを背景としている。説教の映像や宗教に関する内容を含んだ PDF 文書が SNS を媒介にして拡散されるという新しい現象が生まれているのだ。

極めてアナログに見える口頭伝承が、ヴァーチャルな SNS 空間へと拡張していく。ダイナミックな変化の実態が池邉氏の今後の研究により解き明かされようとしている。

『カメルーンにおけるムスリムの書物に関わる諸実践』

平山 草太（日本学術振興会特別研究員 PD）

現代カメルーンでの書物とムスリムの関係に着目して研究を行ってきた平山氏は、自身の研究をセネガル・ナイジェリアという西アフリカの２大国の「隙間」であり、なおかつ民族誌学と文献学の「隙間」であると位置付け、企画展の展示と関連づけつつ発表を行った。

講演の前提として、平山氏は、カメルーンの首都ヤウンデにおけるムスリム街区であるブリケテリ街区について紹介した。ここは、キリスト教徒の多いカメルーン南部に位置するヤウンデにおいて、イスラーム関連書籍の流通が見られる場所である。とりわけ、イスラーム関連書籍を専門的に扱う「イスラーム書店」は、同族経営により計７店舗存在しているという。この一族は、カメルーン独立期にナイジェリア北部から流入したとされ、今日でもナイジェリア北部のカノの市場から集中的に書籍を供給している。こうして仕入れられた書籍は、首都ヤウンデでの店頭販売はもちろんのこと、カメルーン南部の諸都市、果ては隣国ガボン・コンゴでの出張販売により広域的に流通している。このルートに乗って流通する書籍には、中東諸国からの寄付を含め、クルアーンやイスラーム法学書などの定番書が多い一方で、それらの出版元を辿るとカメルーンで発行された書籍は見られず、加えて物流の拠点であるナイジェリア北部で書かれた書籍もごく僅かであるそうだ。また、書物の形態に着目すると、印刷写本が多いという。これは、手書き原稿のデッドコピーであり、品質は必ずしも良好とは言えないものの、古くから好まれてきた伝統的な様式である。このような書物流通の特性について、平山氏は、「カノ書物圏」という野心的な概念を設定し、分析を試みている。すなわち、書物の発信地ナイジェリアや経由地カメルーンにおいて書かれた書籍の少なさは、仕入れが必ずしも受動的ではなく、書籍商による選択の結果であることを示唆しているというのである。

「カノ書物圏」という分析視角の設定は、冒頭で触れられた講演の位置付けと呼応している。すなわち、この概念は、西アフリカの周縁であるカメルーンにおける書物流通の実態をいかなる地域区分から捉えるかという根源的な問いへと繋がっているのだ。平山氏の今後の研究は、書物流通という補助線を引くことで、現代の国境線区分とは異なる西アフリカ地域認識に光を当てるのかもしれない。

大変刺激的な両講演は、多くの聴衆を得て活発な質疑応答が行われ、盛会のうちに終了した。

（報告者：髙田虎太朗・東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科アジア・日本研究コース）

（2）2024 年 7 月 6 日（土）
駒場博物館展示「セネガル・イスラームの歴史と文化」連続ギャラリートーク 2

『西アフリカ・ムスリム社会における知の伝播と再編：ソコト・カリフ国におけるジハードと奴隷』

苅谷 康太（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

苅谷氏は、イスラーム圏の「辺境」に位置する西アフリカのムスリムが、イスラーム圏の「中心」からどのような知識をどのように受容し再編したか、ということを主題に発表をおこなった。

発表の焦点は、15–16 世紀のマグリブの知識人で厳格なイスラーム法の施行や非ムスリムにたいする強硬論などを主張したムハンマド・アル＝マギーリー（1505 年歿）と、18–19 世紀の西アフリカ内陸部の知識人ウスマーン・ブン・フーディー（1817 年歿）との間の知の伝達にあてられた。ウスマーンはハウサランドで宗教・社会改革運動をおこなった人物である。

ウスマーンの改革運動により形成された彼を中心とする「共同体」は、ハウサ諸国にたいしてジハードをおこなった。彼らは 1812 年ごろまでに一帯を制圧し、これによりソコト・カリフ国と呼ばれる国家が成立した。

ソコト・カリフ国はその成立と存続とにおいてジハードと奴隷制という二つの「暴力」を不可欠の基盤としていたというが、イスラーム法においてジハードで交戦がゆるされる者や奴隷化の対象としうる者は基本的には非ムスリム（不信仰者）に限られる。そこでソコト・カリフ国のおこなうジハードや奴隷化の合法性を説明する必要があったのだが、その際に用いられたのがマギーリーの著作であった。

先行研究はウスマーンがマギーリーの著作を全面的に受容したかのような説明をおこなってきたが実際はそうではないと苅谷氏は指摘する。実際にマギーリーの著作『回答』とウスマーンの著作『灯火』とを比較すると、たとえば前者が「悪しきウラマー」らにたいするジハードが最良のジハードであると論じていたのにたいし、後者はそうした議論を不完全な形で引用することで前者の主張の要点を曖昧にし、その上で、ソコト・カリフ国の交戦国たるボルヌの支配層を想定した「背教者」にたいするジハードを最良のジハードとする持論を提示していたことがわかる。また、信仰告白しかしない人々の奴隷化の可否について、マギーリーとウスマーンが属するマーリク学派はジ

ハードを通じて獲得した捕虜は原則的に奴隷にできるとしているが、マギーリーの『回答』は子供の捕虜は奴隷にしてはいけないとして一定の制限を設けているのにたいし、ウスマーンの『灯火』は子供についての言及を避けた上で全面的に奴隷化を容認しているという。

このように、ウスマーンはマギーリーの著作に依拠しつつもその見解を能動的に再編していたと苅谷氏は指摘する。同様の比較検討をおこなっていけば、このような知の再編の事例は他にも数多く見出せるだろうとも苅谷氏はいう。苅谷氏の研究は、西アフリカの知識人による知の再編の様子をありありと描きだすものである。このような事例研究の蓄積は、イスラームにおける「中心」と「辺境」という伝統的で固定的な観念を攪乱しうるものとなるのではないだろうか。

『西アフリカ・イスラーム神秘思想の知の系譜：ハキーカ・ムハンマディーヤ概念を中心に』

末野 孝典（日本学術振興会特別研究員 PD）

末野氏はイブン・アラビー思想を手掛かりに、西アフリカにおけるイスラーム神秘思想の知の系譜について発表をおこなった。発表は、アンダルス出身のイブン・アラビー（1240 年歿）とセネガル出身のイブラーヒーム・ニヤース（1975 年歿）との間にみられる思想的系譜関係に焦点をあてて行われた。

現在西アフリカ諸地域で生きるムスリムの多くはスーフィー教団（タリーカ）に属するが、そのなかでもセネガルはスーフィー教団に属するムスリムの割合が他のイスラーム諸国に比べて圧倒的に多い。特に同国のムスリムの大半はティジャーニー教団もしくはムリッド教団に所属していることもあり、発表ではティジャーニー教団の神秘思想を軸に議論が展開された。

ティジャーニー教団は、北アフリカで活動したアフマド・ティジャーニー（1815 年歿）によってつくられた教団である。彼は、1781 年頃に覚醒状態でムハンマドと出会い自身の教団（タリーカ）をつくるよう促されたことを契機に、自らの教団を創設したとされる。同教団はアル＝ハーッジ・ウマル・タルなどのジハード運動を通じて西アフリカ全域に広まっていった。

さて、現在のセネガルに多大な影響を与えた人物の一人にイブラーヒーム・ニヤースという思想家がいる。彼は 1929 年に「溢出の持主」という霊感を授かり、ティジャーニー教団の支教団に位置づけられる、自身の宗教共同体を創設した。このイブラーヒーム・ニヤースにまで受け継がれていると末野氏が指摘するのがイブン・アラビーの思想である。

イブン・アラビーはイスラーム思想史上の知の巨人として知られており、彼の代表的な理論のひとつにハキーカ・ムハンマディーヤ概念がある。イブン・アラビーはこの概念を、絶対者が自らの意識を顕現する第一段階を指す術語として用いている。

彼の思想はサドルッディーン・クーナウィー（1274 年歿）やその弟子たちによってイスラーム世界の東西へと伝播したが、セネガルもその例外ではなかった。例えば、イブラーヒーム・ニヤースは「慈悲深き御方が玉座の上に鎮座なさる」（20 章 5 節）というクルアーン章句の箇所で神秘的な解釈を行っているが、そこで、イブン・アラビーのハキーカ・ムハンマディーヤ概念をわざわざ引用している。末野氏はイブラーヒーム・ニヤースが先行するタフスィール著作群のなかでみられる解釈を例示するのではなく、明示こそされていないが、アフマド・ティジャーニーの『意味の宝石』のなかで言及されるハキーカ・ムハンマディーヤ概念の解釈を引用・パラフレーズしていると指摘する。要するに、ハキーカ・ムハンマディーヤ概念をはじめとするイブン・アラビー思想が、アフマド・ティジャーニーを介してイブラーヒーム・ニヤースにまで受け継がれているというのである。

「イスラーム世界」の東西に影響を与えたイブン・アラビーの思想に焦点をあて、そして数十年前まで存命であったセネガルの思想家に着目した末野氏の視野の広い研究は、イブン・アラビー思想の系譜の一端を明らかにするもののみならず、現地の思想家の視点を組みこんだアフリカ哲学を再考するうえでも意義深いものとなるのではないだろうか。

（報告者：臼井幹博・東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程）

4. バフワーン文庫便り

バフワーン文庫特任研究員　倉澤 理

5 月に起きた現職大統領の事故死とそれに伴う大統領選による新大統領選出、またガザ情勢と関連して、イスラエルとの関係が何かと取りざたされている現代イランに関する書籍をご紹介させていただきます。

バフワーン文庫は、イラン関連並びにペルシア語の書籍も積極的に蒐集しています。

〇イランの核問題と国際法 / 浅田正彦著
（ii、109 頁、東信堂、2021.5）
※駒場キャンパスではバフワーン文庫のみ所蔵（2024 年 8 月時点）
2015 年の「包括的共同作業計画」の合意、通称「イラン核合意」の成り立ちとその内容、その後の様々な展開を、国際法の側面を中心に解明する。

〇イランは脅威か：ホルムズ海峡の大国と日本外交 / 齊藤貢著

（x、224 頁、岩波書店、2022.2）
※駒場キャンパスではバフワーン文庫のみ所蔵（2024 年 8 月時点）
駐オマーン特命全権大使、駐イラン特命全権大使などを歴任した著者が、イラン・米国関係を軸に、イラン情勢のこれまでの経緯と日本外交の関わりを記述する。

○バザラス：イランビジネスの薫風に乗った男 / 髙木謙次著
（iv, 142 頁、カナリアコミュニケーションズ、2019.4）
※東京大学での所蔵はバフワーン文庫のみ（2024 年 8 月時点）
ビジネスの観点から、イランに関する基礎知識や情報をまとめる。

○イランの家めし、いただきます！/ 常見藤代著
（277 頁、産業編集センター、2019.4）
※東京大学での所蔵はバフワーン文庫のみ（2024 年 8 月時点）
自称「イスラム・エスノグラファー」である著者の、イラン滞在記。家庭料理の紹介もさることながら、男性旅行者では入ることができないであろう、「女性（だけ）の世界」での見聞も本書の特色。

○現代イラン詩集 / 鈴木珠里［ほか］編訳
（136 頁、土曜美術社出版販売、2009.5）
※駒場キャンパスではバフワーン文庫のみ所蔵（2024 年 8 月時点）
男女 12 人の詩人の詩を紹介。

それまで関心がユダヤに偏重していた私が、（「バランスを取る」意味でも）イスラームにも関心を広げ始めた高校時代、確か高校の図書室にあった『イスラムの言葉』（ナセル・ケミール編；いとうせいこう訳、紀伊國屋書店、1996.9、バフワーン文庫も含め東大に所蔵なし）を手に取り、その中で紹介されていた詩に心惹かれました。

ユダヤとも共通する「ことばのちから」への強いこだわりのようなものを感じ取った私は、中東地域に遍在しているであろう「ことばのたから」にもっと出会いたいと思いました。

東京外大のアラビア語科に入学し、その詩をアラビア語科の教官に見せたところ、「それはペルシア（語）だよ」と言われ、「ペルシア語もやらなくては」と自然とスイッチが入り、2 年生からペルシア語の学習も開始しました。

思えば「イラン」は、「ユダヤ」や「アラブ」より、幼い頃からかなり身近でした（私が小学生だった 30 年以上前、生まれ育った千葉のベッドタウンの住宅街のアパートに、イラン人の男性が住んでいました）。

「イラン」は、私の人生で（おとぎ話や教科書の延長の、イメージの産物ではなく）リアリティを伴って認識した、初めての中東の国だったかもしれません。

日本とはこのように馴染みのある国ですが、日々の報道で接するのは政治情勢に絡むものが多く、イラン・ペルシア文化の持つ、深み・奥行きのようなものがなかなか認知されないように感じています。

イランだけに限らず、中東地域に対する認識が、より深化したものになるよう、文庫が所蔵する本が寄与できれば、と日々願っています。

文責：バフワーン文庫　特任研究員
倉澤 理

●UTCMES スタッフ紹介　（2024 年 9 月 30 日現在）

〈スタッフ〉

高橋　英海（センター長、兼務教授）
苅谷　康太（兼務准教授）
鈴木　啓之（特任准教授）
倉澤　　理（バフワーン文庫・特任研究員）
大塚　　修（兼務准教授）
森元　誠二（客員教授）
木村　風雅（特任助教）
瀬口　美加（事務補佐員）

〈UTCMES 運営委員〉

高橋　英海（委員長、総合文化研究科教授）
苅谷　康太（総合文化研究科准教授）
川喜田 敦子（総合文化研究科教授・副研究科長）
黛　　秋津（総合文化研究科教授）
大塚　　修（総合文化研究科准教授）
森井　裕一（総合文化研究科教授・グローバル地域研究機構長）
四本　裕子（総合文化研究科教授）
菊地　達也（人文社会系研究科教授）

〈スルタン・カブース・グローバル中東寄付講座運営委員会〉

高橋　英海（委員長）　大塚　　修　苅谷　康太　森井　裕一
川喜田 敦子　四本　裕子　黛　　秋津

●発行者情報　UTCMES ニューズレター VOL.25　2024年9月30日発行
発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター（スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座）
〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1　TEL：03-5465-7724　FAX：03-5454-6441
https://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/
編集：木村　風雅
印刷：株式会社コームラ　〒 501-2517 岐阜県岐阜市三輪ぷりんとぴあ 3　TEL：058-229-5858　FAX：058-229-6001